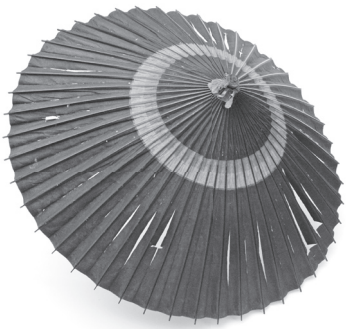
沼津市歴史民俗資料館

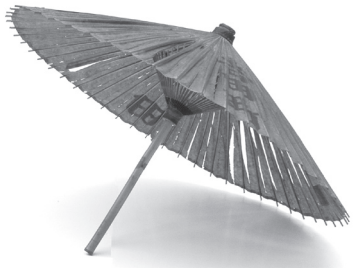
資料館だより

Vol.38 No.1（通巻198号）

2013.6.25（年4回発行）



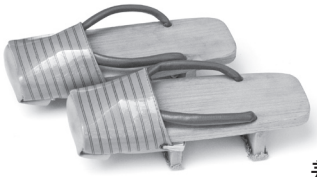
蛇の目傘



番傘

菅笠（上２点）

差歯高下駄（女性用、男性用）



差歯低下駄

蓑

寄贈資料の中から　雨具

今回は、資料の中から雨具を紹介します。

蛇の目傘は、傘の中心に白い輪模様があり、これが蛇の目のようであるということからこの名が付いています。写真の資料は、昭和20年代に婦人のよそいき用として使われたもので、嫁入りの際に持参されました。内側の小骨に糸をかがった飾りが施され、また、傘の開き具合を二段階に調節できます。

番傘は、家印や判などを傘に書き入れたことに由来します。写真の番傘は、大正時代から昭和20年代まで個人宅で使用されたものです。町名と苗字を墨書きしたこの傘が５、６本ほど家に用意されていたとのことです。閉じた際にも持ち主がわかるよう、親骨に苗字が書かれています。

下駄にはいろいろな種類がありますが、足を載せる台の裏に歯を差し込んだものを差歯下駄（さしばげた）といい、これには歯の高いものと低いものがあります。

差歯高下駄（さしばたかげた）は、雨天の外出時に用いられました。写真左は女性用で、昭和10年代に若い娘への土産として購入されました。右は男性用です。共に爪掛（つまが）けという、泥や水のはねを防ぐ覆いがつけられています。当時は現代と違い道路が悪かったため、このような高い歯の下駄が必要だったそうです。

差歯低下駄（さしばひくげた）は小雨や雨上がりの際に履かれたものですが、晴天時にも履いたので日和（ひより）下駄とよばれます。写真の資料は昭和40年初めまで使われた婦人用です。

菅笠（すげがさ）は、菅を縫い綴って作られた笠で、笠の頂に蜻蛉（とんぼ）のようなものがついているのでトンボ笠ともよばれます。これは、笠を製作した最後の部分をまとめたものです。菅笠は日除けとしても使うことができ、乾燥すると菅の隙間があくため風通しもよくなります。農作業には欠かせないもののひとつで、大平地区では、この笠が農家の手工品としてさかんに作られました。

蓑は藁や菅などを編んで作った外套です。写真の蓑は、昭和初めから30年頃まで井出の農家で使われました。主に雨具として使用されましたが、防寒用や、荷物の運搬時の背当てにも用いられました。昭和30年頃からゴム合羽が用いられるようになり、蓑は次第に姿を消していきました。

駿河湾の漁

川上　貢さんの漁話

大謀網の準備

毎年２月になると岩手県南部地方から30人近い漁師たちが大瀬に訪れた。３月半ばから10月まで操業する大謀網と呼ばれた大型定置網を準備するためである。昭和25年に大謀網を始めた時は色々と準備しなければならないものが多かった。

大謀網を設置するということは決まっていたが、大瀬崎のどこに設置するかは決まっていなかった。南部の漁師たちがやってきてから鉛の重しに紐をつけ大瀬崎のいろいろな場所の深さを測った。紐には10尋（約15m）ごとに印がつけられており、海底の深さを測ることができる。測ってみると、大瀬崎の突端部分は底が深く、他は底が浅かった。魚は深いところに来るため、大瀬崎の突端部分に設置することが決まった。

場所が決まると設置する大謀網に合うような網を作らなければならない。現在ならば、業者に頼んで合わせた網を作ってもらうことができるが、当時は自分たちで作らなければならなかった。川上さんにとって初めて経験する網作りのため、網の図面を独学で習得し書いた。たくさんの網を作らなければならなかったので、100間（約150m）単位で売られている網を何枚も購入した。買ってきたばかりの網はピンと張った状態で余裕がない。このままだと袋状に広がらず水中で網と網がひっついてしまう。そのため、網目の位置を調節し網の幅を狭めてたるみを持たせるために縮結と呼ばれる作業が必要になる。川上さんの大謀網では、四割縮結と言い1.4間（約２m）の網を１間（約1.5m）に縮結ていった。縮結には竹でできたアンバリと呼ぶ編針を用いる。アンバリは網を修理する時にも使うので、漁師にとっての必需品である。化学繊維でできた網は、一度仕立ててしまうと、昭和50年頃に大謀網を止めるまで、修理だけで買い替えるということはなかった。

網ができただけでは大謀網を設置することはできない。目的の場所に目的の形で網を広げるために枠となるものを用意しなければならない。この枠のことをガワと言う。ガワを準備するためには多くの労力を必要とする。枠となるガワの他に、浮子となるガワダケ、ガワやガワダケを固定する碇となる土俵を作らなければならない。

ガワはワイヤーにグリスを塗りながらワラ縄を巻いて作る。ワイヤーが海水にさらされて錆びてしまうことを防ぎ、太くすることでガラス玉を付ける作業をしやすくする。ワラ縄を巻いていくためには、南部の漁師たちがどこからか拾ってきた木を使って作られたマキマキと呼ばれる道具を使用する。３本のワラ縄の中心にワイヤーを据え、マキマキを使って撚りをかけながら巻いていく（**写真1**）。あまり長いと持てないため、みんなで持てる程度の長さに作って繋いで使った。

ガワダケは２尋（約３m）の孟宗竹を束ねたものにワイヤーをつける。湯ヶ島の竹屋から毎年何百本もの竹を購入していた。ガワダケ作りには７～８人の漁師たちが関わり、２、３時間あれば１つのガワダケを作ることができる。ウオシキの先に付けられた２つのガワダケには呼び名があり、大瀬崎側をオカノダイ、沖側をオキノダイと呼んでいた。ウンドウバの後方に付けられた２つのガワダケは両方ともハサキと呼ばれた。

土俵には人が運べる程度の50kgの砂利を入れた。最初は大瀬浜の砂を入れたが、後に富士川から砂利を買い、船で運んだ。土俵の砂利詰めや俵に桟俵を付けるために、江梨漁業組合に依頼し地元の若い衆や女性を雇い入れた（**写真2**）。大瀬崎での大謀網はオカバリと呼ばれる手法が取られ、片側を陸地に繋げて固定するので片側は土俵が必要ない。それでも3500俵近い土俵が必要であった。

１ヶ月ぐらいかけて出来上がったガワを海に並べ、網を据え付けると、ようやく漁がはじまる。

※漁師が使う１間、１尋は約1.5mで換算する。

（話：川上 貢氏　昭和５年生まれ　沼津市今沢在住）

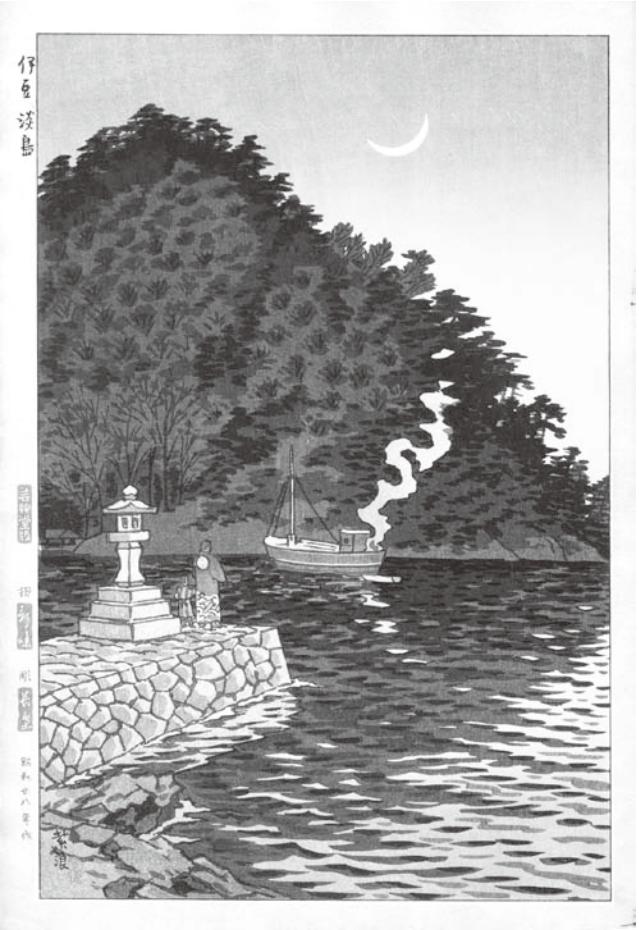
写真1：マキマキを使ってワイヤーにワラ縄を巻く
（昭和32年頃　川上 貢氏　撮影）

写真2：江梨の女性が土俵に桟俵を付けている
（昭和32年頃　川上 貢氏　撮影）

資料館の調査ノートから㉑

新版画による内浦の風景

かつて沼津の地先の海は、漁業だけでなく、その風光明媚な風景から保養地としても人気がありました。そのため絵葉書のみならず、絵画の分野でも多く題材として取りあげられてきました。今回はその中から内浦重寺を題材にした「新版画」をご紹介します。



版画「伊豆淡島」笠松紫浪　個人所蔵

笠松紫浪【かさまつ・しろう　明治31（1898）年～平成３（1991）年】は日本画家・鏑木清方（かぶらぎきよかた）の門人で、はじめ日本画を学び大正５年ごろから版画の製作を始めました。同門には川瀬巴水（かわせはすい）らがおり、彼らとともに衰退した浮世絵版画の復興をめざし、多くの木版画を残しました。川瀬巴水や笠松紫浪らの新しい浮世絵版画は「新版画」と呼ばれ、その郷愁を感じさせる美しく叙情豊かな風景は、国内のみならず海外でも高い評価を受けています。

今回ご紹介する版画「伊豆淡島」は、暮れなずむ重寺の港から親子とみられる二人が淡島を眺めている光景です。父親とみられる大人が着用している長い法被のような服は漁師の祝い着で「マイワイ（万祝、マンイワイとも）」と呼ばれています。マイワイは、大漁のときに、網組名や船名をいれた華やかな意匠の揃いの祝い着を津元（つもと）が網組の衆（漁師）に配ったものです。大漁などの祝いの席や、社寺への大漁のお礼参りのときに揃って着用するいわば「一張羅（いっちょうら）」あるいは「盛装」にあたり、普段の漁で着用するものではありませんでした。この描かれた光景は、たとえば、父親が夜に大漁を祝う宴会を控え、その前の空白の時間に子供を連れて港に散歩しに出かけた、ほんのひとときの静けさを写し取ったものなのかもしれません。

版画の情景を検証すべく、地元の漁師さんに尋ねたところ、昔は重寺漁港の前の公民館のあたりまでが浜だったそうです。版画に描かれている灯籠（常夜灯）は今も残っていましたが、漁港の駐車場の低木の茂みに隠れていました（写真左）。下の写真は灯籠と淡島が俯瞰できる位置で撮影したものです。コンクリートのあたりも昔は浜、あるいは波打ち際だったのではと考えられます。そうしてみると、海岸線がずいぶん変わっているのがわかります。また、版画の灯籠は下に三段石が積まれていますが、現在の灯籠には下に積まれた石は一段しか確認できませんでした。埋め立て時に港の高さも変えたのか、あるいは版画のほうが構成美を考え作画したものかと推測されます。現在の灯籠は130cmくらいかと思われる高さでしたので、版画の灯籠とは高さがずいぶん違っています。しかしながら、灯籠のある風景は50代とみられる漁師の方がご存じだったため、実在の物であったと考えられます。

マイワイを着た漁師については、重寺の津元だったお宅で伺ってみたところ、「（作画された昭和28年ごろ）こういうもの（マイワイ）は作っていなかった」とのことでした。言われてみればなるほど、盛漁で大漁祝いの宴が繰り広げられた時代は、遥か昔、明治のころのお話です。

つまり作画当時すでに、マイワイ自体が、網漁が盛んだったころを思い出させるノスタルジックなシンボルとなっていたということです。作画当時にこのままの光景が見られたとは考えにくく、マイワイ姿の父と子はこの漁師町ならではの「郷愁効果」を狙ってデザインされたものと推測されます。

魚見のある風景②

前号に続いて、昨年度の企画展のために収集した絵葉書関係資料の中から魚見が写されている資料を紹介します。

右上の写真は、内浦紫明堂発行の「内浦名所絵葉書」の一枚で、「長浜網代」の表題があります。宛名面の形式から明治40年から大正７年までの間に発行されたと考えられます。内浦紫明堂の住所は、内浦三津ですが、三津郵便局の局長を務めた内浦重寺の秋山精一家の個人経営の発行所であったものと見られます。（上野尚美「内浦紫明堂絵葉書とその発行背景」沼津市博物館紀要35）

左手の小山は，長浜城跡の城山で、手前が網代、後方が小脇です。山裾には網小屋が建てられおり、その前は石積みの護岸となって、狭い埋立地があり、網干しの施設が設けられています。そこから右手の、同じように石垣で囲まれた沖ノ島に向かって、丸太の橋がかけられています。

沖ノ島には、長い丸太を４本組み合わせた魚見櫓が建っています。筋交（すじか）いが入れられ、柱の中に細い丸太で作られた梯子が斜めに掛けられています。梁（はり）の６段目に床が張られ、手摺（てすり）が付いています。屋根や壁はなく、人が櫓の上に常駐しているようには見えません。左手が鮪などを陸に引き揚げる魚揚げ場でしたから、取り網を引き回し、魚を引き揚げるための指示を出す施設だったようです。右下に小屋があり、ここに人が待機していたようです。

城山の後方に薄く延びているのが内浦重須の長井崎です。その先端近くの崖の上に柱で組んだ魚見櫓が建っているのもわかります。三久保の魚見です。

よく見ると、城山の先端に立つ松の大木には梯子らしいものが掛けられているようです。時代は少し新しくなりますが、右下の別の絵葉書の写真で見ると、幹に沿って長い梯子が掛けられ、上の方の枝に４本の丸太を縛り付けて櫓を作り、松の上に櫓をのせたような魚見が作られています。

絵葉書「長浜網代」紫明堂発行

この櫓の下は、大網を切り回す時の出発点であり、その際に使われる魚見であると考えられます。

この場所は、内浦湾を隔てて富士山を望む優れた眺望が得られるばかりでなく、この地域の漁場の特徴的な景観でもあり、絵葉書ばかりでなく、風景画の題材としても取り上げられています。（平木誠次「富士」静岡県立美術館蔵）

絵葉書「内浦長浜海岸の富士」

資料館からのお知らせ

歴民講座を開催します

平成25年度の歴民講座を開催します。本年度は、例年よりも早く、８月25日（日）を予定しています。内容は、昨年度の講座の際のアンケートで希望の多かった山本勘助（菅助）を取り上げます。市内に残されていた山本文書は、北海道に残されていた市川文書、群馬県で発見された真下文書に次ぐ勘介の実在を示す重要な史料です。

その調査に携わった平山優さんに、昨年度の三枚橋城将春日信達に引き続いて、今までの研究成果をお話いただきます。

広報ぬまづで応募方法をお知らせいたしますので、ご期待下さい。

職員の異動について

平成25年3月31日をもって、嘱託職員佐藤裕子が退職し、４月２日から同小松大介が採用されました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2013.6.25 発行　Vol.38　No.1（通巻198号）
編集･発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:http//www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

R70
古紙配合率70%再生紙を使用しています